

授業アンケート結果 報告書

平成 29 年度(2017 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

全体総括

毎年、前年度の授業アンケート結果を集計した報告書を大学のホームページに掲載し、情報公開に取り組んでいる。アンケート結果から、前年度（平成 28 年度）と同様、平成 29 年度においても予習・復習の時間が少ないなど、「学生の授業への取り組み」はまだ不十分な点があることが分かる。しかし「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義のある授業」が行われていると考えられる。

1. はじめに

本学では、各教員の授業方法・内容の充実を目指し、実習を含むすべての講義・演習・実習科目について、受講学生に対し前期・後期に 1 回ずつアンケート調査を行っている。アンケートは無記名であるが、教員自身がアンケートを実施し用紙を回収することから、回答内容が教員に分からないようなアンケート実施方法を定め、各教員が遵守している。

授業アンケートは、「学生自身の授業の取り組み」に関する 5 問、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する 7 問、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する 2 問、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する 1 問と、全部で 15 問の質問から成る。さらにアンケート用紙裏面には、学生の意見を直接記入できる欄があり、各教員の授業に対する学生の「生の声」を反映させることができるようになっている。授業内容を適切に反映させた回答を受講者に促すため、前期・後期の期末試験前までに、授業時間内でアンケートを実施している。

授業アンケートの結果は集計され、授業科目ごとに各質問項目に対する 4 段階評価の度数分布図表及びレーダーチャートを記載して各授業担当教員に配布している。4 段階評価点数が 8、3、2、0 点であるため、各授業科目に対する評価の差が顕著に表れている。また FD の一環として、学科内ですべての教員の担当科目の集計結果を閲覧することができ、教員相互の講義参観などにより、授業の改善や向上に役立っている。平成 17 年度(2005 年度)以降、本形式の授業アンケートを実施して結果に対するフィードバックに取り組み、平成 23 年度からは授業アンケート集計結果を公開して蓄積することとした。アンケート結果の蓄積は、「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」本学の教育理念に相応しい教育が継続的に行われているか否かを評価できる有益な資料となると考えられる。

全学的なアンケート結果は、例年どおり「学生の授業への取り組み」はまだ不十分であり、教員から学生への予習・復習の喚起が必要であること、また「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義のある授業」が行われていることを示している。「学生の授業への取り組み」に関しては学科間での違いがあり、以下学科毎のアンケート報告内容を参照していただきたい。

2. 授業アンケートの実施方法

アンケート内容と実施の変遷について：

本学では、平成 17 年度(2005 年度)より授業アンケートを実施している。授業アンケートの質問項目は適宜見直され、特に平成 22 年度(2010 年度)から教員が授業を改善できるよう質問項目の見直しを行い現在に至っている。また、授業アンケート結果を年度間で比較し教員の授業改善に役立てるために、授業アンケートの質問項目は、同じ項目を使用しているが、平成 26 年から設問項目を 2 項目増やして実施している。各年度とも前後期に各 1 回、年 2 回アンケートを実施している。

アンケート対象学生数と教科について：

平成 29 年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成 29 年	前期	479	113	35	148	14353	16214
	後期	477	112	30	142	13362	15562

アンケート集計・解析方法とそのフィードバック方法について：

集計の後、各質問項目に対する度数分布表（4段階評価点数が 8、3、2、0 点）を作成した。大学全体、学部、学科、各科目単位で、質問項目を計算し、一覧(平均値一覧表)にまとめた。授業アンケート結果については、科目担当者に配布するとともに、授業アンケート集計表（度数分布表・評価レーダーチャート）をまとめて学部長へ配付し、その後学科長が各学科において、授業アンケート結果をふまえ適切に授業改善につなげられるようにフィードバックを実施している。学科毎に専門が異なり授業方法なども多種多様なため、具体的な内容や方法は課題として残されている。

なお、平成 28 年度（2016 年度）より、授業に対する学生の自由記述内容についてもデータ化を行っており、授業改善のための課題として整理する準備を進めている。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について全学的結果あるいは各学科結果について個々に記載する。平成 29 年度アンケート結果は、過去の結果と比較して、学科間の相違や各学科での前期と後期の相違に着目してまとめた。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

「教員の授業に対する取り組み」は概ね高評価であった。「学生の理解度・達成感」では、前年度よりも向上が見られた。しかし「学生の授業への取り組み」では、前年度と同様に、大部分の学科で予習・復習時間や準備学習が不十分であった。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われていると考えられるが、これまでのアンケート結果と同様に、学生の勉学に対する受け身の姿勢を改善する方策について各学科で検討する必要があると思われた。

「学生自身の授業の取り組み（Q1～5）」

前期・後期ともに、多くの学科で授業を4回以上欠席する学生は10%以下であった（Q1）。前年度欠席回数が多かった学科のうち、スポーツ健康福祉学科と臨床福祉学科では改善が見られたが、子ども保育福祉学科では前年度よりも欠席回数が増加していた。臨床工学科を除き、前期・後期を通して予習を行っている学生は50-60%程度（Q2）、復習および準備学習を行っている学生は60-70%であり（Q3、Q4）、前年度と同様に不十分な状態であった。臨床工学科では、予習・復習、準備学習を行っている学生が多く、特に後期において極めて高い割合を示し、学科間の指導の違いが現れていた。これと連動するように、臨床工学科では学習に意欲的に取り組む学生の割合も高かった（Q5）。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み（Q6～12）」

シラバスに沿った授業と目標や習得すべき事項の説明（Q6, 7）、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力（Q8, 9, 10）、また、わかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか（Q11, 12）については、前期・後期ともに、概ね90%以上の学生が教員の努力を感じており、また前年度よりも学科間の差が狭まっていた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度（Q13・14）」

学生の理解度や学習意欲の高まり（Q13, 14）に関し、多くの学科において前年度からの上昇が認められ、全体として学生の約90%の学生が授業を理解して、意欲があったと回答している。しかし、視機能療法学科では前年度からの上昇が見られなかった（後述のQ15も同様である）。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か（Q15）」

多くの学科では、90%以上の学生にとって「授業は意味のあるものであった」と考えられる（Q15）。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は昨年の結果では、学年が上がるに従って欠席回数が増える傾向が見られたが、29年度の特徴は、2年次になっても欠席が増えていくという傾向が見られた。これはほかの学科の結果と比較しても特異的な現象で、学科として注意すべき点である。【予習復習時間】では、1年次ではほとんどしなかったという学生が約60%いるが、これは昨年と同様の結果となっている。1年次からの予習復習が大事であることを、繰り返し伝えてきたが、それが十分浸透していないことがわかる。再度、全教員に1年生のうちから予習復習の学習習慣を身に着けるように指導を促す必要がある。【授業中の取り組み】を見ると、「Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか」の問いに対して、2年次の結果が1年次より悪くなっている。例年の結果では学年が上がるにつれて授業態度が良くなっていくのだが、ここでも2年次の問題結果が出ている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

授業の分かりやすさや講義資料の適切さに関しては、例年の結果では1年次には不満を持つ者もいるが、学年が進むにつれて減っていく傾向がある。ところが29年度の結果では、2年次の教員に対する不満度が1年次と比べてあまり改善しない傾向となっている。特に「Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」では、明らかに1年次より数値が悪い結果となっている。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度の「学習意欲」に関しては、前期1年次「あてはまる」と回答した学生が70%と、昨年度より数値が良くなってきている。1年次にはできるだけわかりやすく伝えるという各教員の努力が少し功を奏したのではないかと考える。そのほかの質問に対しての結果は昨年度とほぼ同様で、前期よりも後期また学年の進級につれて理解度・達成度が上がっている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

29年度も授業の意義について90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。しかし、「あまり当てはまらない」と回答した学生数は2年次が一番多く、昨年度は見られなかった傾向である。ここにも29年度の2年次の特徴が出ているので、この結果を全学科教員と共有し、この学生たち（現3年次）の指導に当たっていく必要性を感じている。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果 (図IV)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は前期よりも後期に欠席回数が多くなる傾向がある。欠席0回の学生の割合は1年前期約65% (昨年74%) から4年後期約42% (昨年46%)、1~3回欠席は1年前期約34% (昨年25%) から4年後期約42% (昨年46%)、4~5回欠席は1年前期約0.6% (昨年0.5%) から4年後期約14.2% (昨年8%) と、学年の進行に伴って欠席回数をコントロールして授業を休む学生が増える傾向がある。3回以内の欠席でみると、1年生では95%を超えているが、2年後期で91%となり、3年後期で89%、4年ではさらに低下する。【予習復習】は学年が上がるにつれ、「ほとんどしなかった」学生の割合は低下する傾向が見られ、予習では1年前期約57% (昨年60%) から4年後期約14% (昨年38%)、復習では1年前期約51% (昨年55%) から4年後期約13% (昨年31%) となっていた。【学習への意欲的な取り組み】では85%以上の学生が肯定的な回答している。

欠席状況については、学期中に教育実習や就職活動が行われる4年以外では、3回以内の欠席者はほぼ9割と昨年度と大きな変化は見られなかったが、授業出席への意欲を維持させるために、徐々に専門性が高くなる2年、3年での授業の工夫が必要である。予習復習は「ほとんどしなかった」学生の割合が低下傾向にあった。2年後期に中弛みのような状況がみられるので、対策が必要である。資格試験に対する意識づけを高める指導を行い、ほとんどの資格試験で全国平均を上回る合格率となっているが、学年進行とともに受験をあきらめる学生が増加している。意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化が認められる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6~12のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると全学年において90%を超える肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとすべての学年において90%を超える肯定的な回答を得ている。「あてはまる」だけに着目すると70~90% (昨年68~91%) であり、昨年よりやや改善されているようであった。しかし、1年は前期・後期ともに74~90% (昨年68~70%) と大きく改善されていた。大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善に各教員が取り組み、実践した成果であろう。ただし、2年の評価が他の学年に比べて低く、予習復習における中弛みとリンクしているようである。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしており、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。「あてはまる」だけに着目すると72~92% (昨年75~96%) であり、昨年よりやや低下している。しかし、1年は前期80%・後期92% (昨年は前期・後期ともに約75%) と大きく改善している。本学科への進学に対する満足度を上げるために、特に新入生の段階から、今の学びが将来につながっていることを学生に授業を通して理解させながら、学習意欲の向上を図る取り組みを行っているが、これを継続していかなければならない。

子ども保育福祉学科アンケート結果（図V）

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】：前期においては0～3回欠席が昨年度は全学年において80%を超えていたが、本年度はわずかではあるが80%を下回った期があった。本学科は募集停止となり、次年度で学科を閉じることになる。したがって、在学生全員がそろって卒業できるように、欠席によって単位取得ができなくなる状況を避けるべく、細やかな指導を行っていかなければならない。

【予習復習】：3年次よりも4年次の方が予習・復習を行っている者が多い。4年次は前期よりも後期の時間が増加しているが、3年次は大きな増加は見られない。最終学年へ進級後の最初のオリエンテーションにおいて、学習への動機づけを如何に行えるか、その後の年間を通しての継続指導が大切である。

【準備学習】：「ほとんどしなかった」学生は3年次前期約50%・後期約39%、4年次前期約19%・後期約10%と学年による差が大きい。予習復習と同様に、3年次の4年次への進級後の指導が大切である。

【授業に対する取り組み】：4年次は前期より後期の方がその取り組み姿勢に改善がみられたが、3年次は低下している。学生の学習意欲を低下させることのないように、授業をはじめとした学生への指導の見直しを早急に図る必要がある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。」は、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答が85%以上、「Q7. 担当教員は、授業の目標や習得すべき事項を、毎回説明していましたか。」についても95%以上であった。「Q8. 担当教員は授業の開始時刻を守っていましたか」については、後期に両学年ともに評価が大きく低下している。各教員は反省が必要である。「Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」「Q10. 担当教員は、学生に授業への参加を促していましたか(質問等)。」「Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。」「Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか(教科書を含む)。」に関しては、「あてはまる」「ややあてはまる」が90%を超える評価であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q13. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」及び「Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。「あてはまる」「ややあてはまる」が前期では90%前後であったが、後期では50%前後まで大幅に下がっている。原因を明らかにし、早急に対応が必要である。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q15. 授業は意義あるものでしたか。」について、本問は総合的な授業評価を問う最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられる。前期では90%を超えていたが、後期では50%以下まで大幅に低下し、授業に対する学生自身の理解度・達成度と同様の結果となっている。原因を明らかにし、早急に対応が必要である。学科最後の卒業生を十分な知識と実践力を身に着けた状態で社会に送り出せるように、授業をはじめとした学生への指導の見直しを早急に図る必要がある。

作業療法学科アンケート結果 (図VI)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、3回までを含めると95%程度と概ね良好である。1年次(19期生)は後期に欠席が増加しているが、高学年になるにつれて欠席は少なくなる。期末に控える臨床実習を意識しだす結果だと考える。

予習復習について、予習は全学年をとおして「ほとんどしなかった」との回答が50%を超え、復習は後期に改善するが大きな変化ではない。ただし、4年次の前期のほとんどが学外臨床実習であるのに復習が少ないのは理解できない。学生がケースノート作成などを復習と捉えていない可能性がある。この4年次のデータは他の質問項目についても同様のことが言える。

私語や居眠りについては80%が「あてはまる(していない)」と回答しており、これは教員からの評価とも一致する。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ねシラバスどおりの授業進行であると回答している。学年が進むにつれてシラバスに添っているとの回答が多くなる。教員の授業内容説明についても同様で、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で90%を超えている。

教員の授業に対する取り組みも(開始時間も含む)、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で90%を超えている。ただし、全学年を通してそもそも私語などは少ない。

授業参加への促しについても同様であり、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解について、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%前後であり、「あてはまらない」との回答はほぼ0である。

学習意欲についても同様で、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%を超える。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

講義の意義について、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%を超える。

前年度の調査では、授業の取り組みを始めとするほぼ全ての項目で2年次(18期生;現3年)は、特異的な低値を示していたが、本年度の結果では改善傾向がうかがえる。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、いずれの学年も欠席3回以内の学生が95%以上と良好な結果を示していた。1年生で前期に比し後期の欠席回数が多い点については注意喚起が必要である。

予習時間および復習時間は、30分以上学習する学生の割合が10~50%と学年により差がみられた。とくに、3年生が前期、後期ともに10~20%前後であり改善が必要である。

シラバスに記載されている準備学習については、30分以上行っている学生の割合が全学年とも前期で80%以上と高く評価できるが、後期まで維持することを目標にしたい。

低学年での自主的な学習の習慣化が課題である。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスにそった授業、授業目標・修得すべき事項の説明、授業への参加の促し、わかりやすい説明や指導、講義資料の適切性、授業の雰囲気については、いずれの学年も90~95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、教員の授業に対する取り組みが高く評価されていた。

授業の開始時間を守っていたかに対しては、全学年で50%近くが、あまりあてはまらない、または、あてはまらないと回答していた。後期は全学年で95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており改善がみられているものの、前期については検証が必要である。

初年度である1年次や、国家試験対策が中心となる4年次には、学生の理解度に配慮し、講義資料や指導方法を適宜、見直す必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、および、授業で学習意欲が高まったかに対しては、いずれの学年も90~95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、授業に対する学生自身の理解度・達成度は高いといえる。

しかし、あてはまるだけを見ると学年により差があり、1・4年生の前期は60%前後と低い傾向があった。大学の授業形態への導入時期である1年次と、多数の国家試験科目の総復習を中心とした4年次には、学生の理解度にとくに配慮が必要であることが伺える。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、いずれの学年も95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており高く評価できる。しかし、あてはまるだけを見ると、2・3年生が80%前後であったのに対し、1・4年生前期が60%程度と低い傾向があった。

学生の満足度を高めるためにも、学科教員間で、各学年の授業の内容や方法について議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

視能療法学科アンケート結果(図Ⅷ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】他科に比べ授業への出席率は最も高い。後期に関しては、授業欠席に対する単位への影響等を指導した結果、欠席者数は減少した。これは、高学年ほど減少傾向が見られた。おそらく、国家試験や就職等、社会人としての自覚が芽生えたことが考えられた。

【学習への意欲的な取り組み】これも、高学年ほど予習をする人数および予習時間が多くなっていたが、反面、Q1～Q3の自主学習時間（予習復習）については前期と後期を比較すると他科では増加しているが、本学科では変化なし、もしくは若しく減少している。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～Q12のすべての質問において、3～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると90%以上の回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ていた。一方、1～2年次では50%以下であり、基礎科目において低い傾向が見られた。Q9～Q12については、本学科でも高い傾向ではあるが、他学科を含めた全体からみると学生の満足度が低い。それは、特に1～2年次の基礎科目で多く観られた。その理由として、高等学校までとの授業スタイルの違い、たとえば、パソコンおよびプロジェクターを用いて、板書が少ない、あるいは、理系でもこれまで選択していなかった生物学的科目等に対する戸惑いが考えられたことに起因することが考えられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

Q13～Q14のすべての質問における、学生の理解度・学習意欲の高まりについても、3～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。しかし、1～2年次は前期・後期ともに50%程度であった。その理由として、上記と同様に高等学校までとの授業内容および授業スタイルの違いが考えられた。大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善に取り組む必要があるだろう。また、授業が判らない場合や、不服、不満等がある場合に学生が気軽に相談や不服申し立てできるような窓口を当科として設ける等の対策を構築したい。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は、3,4年の後期では昨年と同様に90%以上となっていた。一方、1,2年次は前期・後期ともに60%程度であった。

当科においては、1～2年次の基礎科目においても国家試験に準じたカリキュラムを行っている授業もあるが、そうでない授業もある。しかし、国家試験合格のみが、社会に有為な人材の育成という本学の建学の理念における最終目標であるとも限らず、多方面での教養や知識が、本学卒業後にも、役立ちうるといった、広い視野をもって学習すべきとも考える。いずれにせよ、低学年においては、国家試験合格の役には立たないかもしれないが、興味を持てる面白い授業を行うことで、生涯を通じて、学習とは楽しいことであるということを悟って身につけていただければ良いと考える。そのためには、楽しく学習でき、いつでも質問、不満などを気軽に相談できる開かれた自由な雰囲気が必要であると考えられる。3,4年次の高学年においては、この雰囲気はかなり構築されていると思われる（国家試験対策が主であるが）。一方、低学年、特に1年次においては、不慣れな点もあり構築されていないと考える。

臨床工学科アンケート結果（図Ⅸ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数は、全学年で見ると前期、後期ともに大きな差はないが、4年次生においては後期に欠席回数が若干増加している。予習の時間に関しては、前期より後期が増加している。1年次においては前期に予習をする学生が非常に少ないが、授業の内容が本格的なもの（専門的）になる後期においては予習していることがわかる。復習についても予習と同様な傾向を示しており、予習・復習をしないと授業についていけないことを理解している。4年次生は予習復習の時間が最も長く、国家試験対策に集中していることが分かる。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様の傾向であった。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、後期に増加傾向となった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、全学年ともに8割以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測されたが、「授業の開始時刻」については、全学年において前期の授業において「あてはまらない」と回答している。しかし、後期については「あてはまる」が9割であり、この差異については原因が不明である。教員全体のミーティングでは前期・後期ともに同様の対応を行ってきた。今後、アクティブラーニング等の取組を増加させ、引き続き、学生個々の能力を伸ばす指導を継続させることが重要である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標は習得すべき事項の理解」、「授業での学習意欲の高まり」については、全学年ともに9割以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、今までの学習が十分になされていることが伺える。しかし、4年次後期において学習意欲が低下している学生が僅かだがいる。国家試験対策で少し疲弊している可能性がある。この時期の4年次学生は精神的にも不安定であり十分なフォローをする必要がある。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年ともに9割近い学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、授業は意義あるものであったと推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に望んでいたと言える。今後、授業の中に積極的にアクティブラーニングあるいはWeb学習などを取り入れ、一方向型教育の改善が必要であると感じられた。

薬学科アンケート結果（図 X）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席3回以下がほとんどであった。ただし、6年後期では、4・5回及び6回以上の欠席が合わせて30%以上あり、昨年度より多かった。

予習・復習については、ほとんどしなかった学生は概ね30～60%程度であった。予習に関しては、6年後期では約10%以下と低値であった。復習についても同様の傾向が見られた。また、5年前期では、予習・復習をほとんどしない学生が大部分を占めた。これは、I期実務実習中である事が一つの要因だと考えられる。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%を超えており良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みに関する設問では、すべての設問について「あてはまる」、「ややあてはまる」が90%を超えており、ほとんどの教員が真摯に授業に取り組んでいることが伺えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度については、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価がほぼ90%超であり良好であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ90%超あった。

動物生命薬科学科アンケート結果 (図XI)

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席3回以下がほとんどであった。その中で、4年生の前期において1~3回の欠席が他学年よりも多く、概ね40%見られたが、これは就職活動のためと考えられた。また、後期の1年生で「6回以上」の欠席が他学年に比して多く、概ね10%見られたが、その理由は不明であった。

予習・復習時間は少なく、ほとんどの学年および学期において、「30分未満」、「ほとんどしなかった」を合わせると、概ね50~80%を占めていた。シラバスに記載されている準備学習についても少なく、「ほとんどしなかった」、「30分未満」を合わせると、概ね40~70%を占めていた。しかし、「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、概ね80%を超えており、学習への意欲的な取り組みは、比較的、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に関する取り組みに関する設問では、全ての設問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、全ての学年および学期において概ね90%以上と高く、良好であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

ほとんどの学年および学期において、「授業の目標や修得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高まり」の質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は概ね90%以上であり、理解度・達成度は高かった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

ほとんどの学年および学期において「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、概ね90%以上であり、「授業は意義のあるもの」と回答した学生が多かった。

生命医科学科アンケート結果（図 XII）

「学生自身の授業の取り組み」

2015年新設学部のため、1, 2, 3 回生のデータのみである。授業欠席回数 0～3 回は、前期・後期ともほぼ 98%であった。学生の授業出席率は大変良好であった。予習・復習については、予習を 1 時間以上行った学生は前期・後期を通して、概ね 10%であった。復習を 1 時間以上行った学生は 1 年生ではおよそ 20%であった。予習を 30 分未満～ほとんどしなかった学生は前期・後期を通して、1 年生でおよそ 60%、2, 3 年生でおよそ 80%であった。復習を 30 分未満～ほとんどしなかった学生は前期・後期を通して 1 年生でおよそ 55%、2 年生で 65%、3 年生で 60%であった。全体的に予習より復習に時間をかける傾向が認められた。しかしながら全体的に学習時間が短いのは今後改善する必要のある事案であると認識した。「学習に意欲的に取り組んだか」という設間に対しては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%前後であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそった講義かどうか」、「授業の開始時刻は守られていたか」、「授業中の静穏な雰囲気は保たれているか」についての設間では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%以上であった。ほとんどの学科教員の講義は高評価であった。「担当教員はわかりやすい説明や指導を行ったか」についての設間でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期通して 90%以上であり、概ね学生の満足度は高いことが伺われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」についての設間では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期ともに、90%以上であった。「授業で学習意欲が高まったか」についての設間でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期を通して 90%以上であった。このことから概ね学生の満足度は高いと思われる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「授業は意義あるものだったか」についての設間では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%以上であった。少数の学生を除いて、大多数の学生は自身の将来の目標を定めたことで、学生自身の理解度・達成度が高くなったことが推察された。